

1996-6

日本鉄鋼連盟管理者セミナー
於: NKK経営研修所/鶴見

講義&討議④ 文化・教養部門

日本の明日を考える

95年危機を越えて

1996. 2. 22

橋爪大三郎

(東工大)

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月より、大学院社会理工学研究科VALDES専攻新設予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『近代国家とオウム(仮題)』(共著、南風社・近刊)ほか。

□1□ 95年危機とは何か

- 1) 阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 → 日本社会の構造的弱点があらわになった。(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) 95年現象の意味
 - i) ポスト冷戦が、日本に波及 55年体制の崩壊→統治能力の解体(無能首相)
 - ii) 日本の戦後50周年 「戦後的なもの」が社会を覆いつくしたための現象?

□2□ 95年危機の診断学 ~借り物近代が、制度疲労を起こしている

- 1) 憲法 ・ 出発点からその正統性に疑問が 60年安保 70年学生叛乱
・ 国民と権力の統治契約でなく、日本とアメリカの統治契約
・ 「法の支配」に対する抵抗感 → 人間関係の実質を優先(機能集団の自閉)
- 2) 歴史 ・ 過去/現在/未来、自己/他者、加害/被害を貫通する視点(文体)の設定
・ 自己中心的言説の氾濫 心情・感性・利害・イメージの優先
・ 過去が現在を支配することに対する嫌悪 構築的な社会原則の否定
- 3) 科学 ・ 「哲学的孤独に耐える自己」の不在 論理・批判的認識・職業倫理の未熟
・ 科学はもうひとつの「体系的な世界観」で、闘争を通じて宗教から分離した
- 4) 宗教 ・ ドグマ・権威に対する嫌悪 仏教→神道と習合 儒学→心情道徳に変貌
・ 宗教は、現実生活に対する二次的・機能的補完物
- 5) 資本主義 ・ 「資本家」の不在 利潤追求は、企業の機能的要請にすぎない
・ 官僚機構のプレゼンス 企業の横並び 新規参入への妨害

- 6) 教育 ・ 「受験」による教育の空洞化 教育の内容(知識)に対するニヒリズム
・ エリート教育の不在 高等教育の機能麻痺
- 7) 政治 ・ 政治: 関係する人びとを拘束する意思決定を行なうこと 政治=意思決定
・ 選択の回避、意思決定の回避→政治の回避 55年体制下、政治は儀式だった
- 8) メディア ・ 報道の文体(事実/意見)の未成立 ジャーナリスト職の未確立
・ バラエティ: テレビ局で面白いことが起こる → 視聴率優先~価値相対主義
・ ヒューマンズ(オウム=悪)と相対主義(反論も可)の共存 → 更なる頹廢

□3□ ポスト冷戦世界を展望する

1) 2020年の国際社会

- * リー・クワン・ユー元首相の予測 GDP: ¹中国 ²アメリカ ³インド ⁴日本 ……
欧米世界の覇権 vs アジア・パワーの台頭 資源(原油・食糧) 価格の高騰
- * 情報ハイウェー: 通信価格がゼロに→情報が自由財に ~ビル・ゲイツ『未来を語る』
⇒ 巨大企業組織(特にそのマネジメント機能)の解体・本社機能のアウトサイジング

2) 住専問題: 世界標準で動かない日本システム

- * 戦後の金融政策 土地を担保とする土地本位制→バブル・メカニズムの発生
- * 法によらない官庁支配(許認可行政)~特殊法人(天下り構造)~護送船団方式
- * 日本株式会社の終焉 業界談合体質→競争市場へ 持株会社解禁: 資本主義復活

3) 政治改革のゆくえ

- * 中選挙区制→小選挙区制 : 脱55年体制の器づくり 器はできたが、政治の実質は?
- * 新進党の失敗 有権者の「選択」を優先しないで、政党の数合わせを先にした
- * 国民を指導する(複数の)明瞭・簡潔な政治哲学(+リーダー) ⇒ 政党へ

4) 日本の再定義へ

- * 戦後日本の定義 大日本帝国→日本国(多民族→単一民族、拡張主義→孤立主義)
ナイーヴなナショナリズム → 鬱屈したコスモポリタニズム 自我縮小症候群
戦略的国家目標(政治/軍事/外交/経済/学術)→その否定(経済優先)
 - * ポスト戦後日本は、「戦前的なもの」への復帰なのか
“日本=自然単一民族”説の克服→「外国人」もまた日本の正統な構成員であること
日本の与件: 位置・自然環境・日本語・社会伝統・歴史・産業・経済力
日本の条件: 産業化した日本は、世界との連携のなかでしか生きられないこと
 - * 国家目標: 世界が共存できるための条件を、積極的に作り出す × 単純な利他主義
- #### 5) VALDES (社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)
- * VALDES: The Advanced Program for Value and Decision Science
入試: 哲学+数学 加算科目: 文系科目 + 理系科目 人材: 最高意思決定に参画
 - * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く)→国家の再構築へ

☆VALDES入試のお問い合わせは、橋爪大三郎研究室(☎ 03-5734-2667)まで

権力の可能条件

橋爪大三郎

* 岩波講座現在社会学第16巻『権力と支配の社会学』の同題原稿のレジュメ

§ 権力の謎

- 権力は不可能なのか 権力は一般的概念 $\longleftrightarrow$ 権力の西欧的文脈(local knowledge)
個人、自由、強制力

§ 権力の定義

- i 選択肢（行為の前提） 権力の定義それ自身が、西欧的文脈に
- ii 自由意思（自己原因による選択） 内属している
- iii 選好
- iv 反実仮想（外的原因） なぜ、選好上位の選択肢を選択できなかったのか？
↓ 二者モデル（権力の予期理論～宮台）はこれへの一解答
- v 権力現象の発生 しかし権力は、多者たちのあいだに反実仮想の選択肢（権力の源泉）が隠れていることではないのか

§ 権力と自由

- 権力と自由（意思）は相関的な概念である 決定論（機械的モデル）に権力の余
自由が自覚され、発見されるほど、権力も 地はない
発見される（権力は自由の補集合と映る）
- 社会関係
 - 自由意思により接続する～契約（市場） 個人主義的社会モデル
 - 自由意思に先行する～選択肢集合（初期手持ち量） ←権力が拘束？
- 個人主義的理論（たとえば、権力の予期理論）に、権力の謎はこう映る
 - Q 1 権力の非対称性はどのように生じたか（強盗はなぜ強盗か）
 - Q 2 選択肢集合など行為前提はどのように与えられたか
行為前提を行為の中間生成物とみなし、他の行為に還元しても、問題が再生

§ 了解の円環

- 反実仮想は、行為の現在に不在な状況（社会的文脈）を行為に関係づける営み（＝了解）の、ひとつの作用と考えられる

了解は、世界像を構成する 世界像は、自己および他者を含む

了解は、他者の行為選択についての明瞭な像を含む 了解は、対称的に生ずる

Df 了解の円環：人びとの了解が相互に織り込んでたどりつく収束状態

了解の二律背反 i 了解は十分に精確で、他者の了解作用を織り込んでいる

ii 自己の了解は十分に独自で、他者から届かないほど深い

i / ii (≡唯物論的リアリティ／現象学的リアリティ)

が完全に同致することは、（論理的に）ありえない

しかし、ある均衡状態には収束しうる

Th ひととは、自分の了解が世界の実態から剥離していることを、確証することができない ⇒ 了解の円環の成立



§ 知識と権力（略）

§ 普遍的作用としての権力

- 権力は、社会に不可避にそなわる作用である
 - i 人びとは身体として存在する（社会は身体の集合）
 - ii 人びとは、自己／他者についての了解を営む（世界を構成する）
 - iii 人びとは、相互に言語（遠隔な身体作用）によって交渉する（世界は意味的である）
 - iv 人びとは、身体を通じて直接に交渉する（性的相互作用）
 - v 人びとは、身体として他の身体と共にあることで、集合的な効果のもとに置かれる
この効果は、身体が性ならびに言語によって交渉することの、間接的で独立な作用（権力）である

§ 世界が参照される形式

- なぜ、了解の円環は、意味世界（通用する過去の総体）と行為の現在（世界の実態）とのあいだに乖離を生じさせるのか
- 言語は、間身体的な不変作用素である（意味を変化させない）→不在の他者たち（死者を含む）の言説や彼らの社会関係、行為の妥当性（過去の社会の様式）を保存する
- 不在となった行為列（過去の社会）は意味として保存され、新たな行為を可能にする

…… 一行為一行為一行為一 現在の行為 → t
 端点は過去に
 没している 過去の行為列（社会） 行為は未来に向かって開かれている

- ・過去の行為は、①前提され、②言及され、③因果的に支配し、④規範的に支配する
- ・多くの場合、過去の行為は分離されず、集合的にひとつの地平を形成する
- ・この地平の背景（集積効果）のなかで、あらゆる行為は可能になっている

§ 権力はどのように妥当するか

- ・権力は全域的な作用であるので、局所的な体験に還元できない
- ・権力の妥当問題：ある局所で効力をもった権力関係が、それ以外の場所でくつがえされことなく権力として有効であり続けること

権力が妥当であることは、権力関係のなかで働く予期と、相互に円環している

（権力が妥当するだろうと予期したので、権力関係が成立する／権力関係が成立したので、権力が妥当する）

- ・権力関係にある両当事者は、双方の背景にある権力の妥当域を、具体的に見通すことはできない

あの時受け取ったのは税だ	私は王の代官だ、税	あの時払ったのは税だ
王－代官X	代官X－農民A	農民A－村長
だからあれは私のものだ	を払え→税を払う	これ以上払わなくていい

Xの妥当域

権力関係

Aの妥当域

これら権力の妥当域は、その全体の構造において、権力の妥当条件を作り出す

§ 線的な作用としての権力

- ・権力の本質は知識である
 - ・各人が知識を抱いており、各人が知識を抱いていることを各人が知識として抱いている …… この知識の高階な集合性のうえに、権力は作用する
 - ・権力は、権力の妥当域から、権力関係（権力の作用する場）を通して、再び権力の妥当域へ通過していくような、線的な作用である（権力には方向がある）
- 権力線の上流に、ひとは権力源泉を想定する 下流に、権力に操作される対象を想定する

$$\text{権力空間} = \int \text{権力の妥当域}$$

- ・ひとは権力を、命令関係の一種であると解釈（モデル化）する
- 権力線の最上流に想定される、神、国家主権といった観念は、人びとが命令モデルによって権力空間を解釈した結果である そしてこの解釈は、正確でない
- ・権力の拘束性（逃れがたさ）の本質は、ひとが自分の内属する空間（身体の内・ここ）からのがれられない事実由来する この事実は多様に解釈される

- ・権力は、それ以外の社会関係一般と混融している それは、どう区別されるかある関係が、それ以外の空間でも「妥当」していく——これを保証するのが、権力の現実性の第一歩である この「妥当」の手続きが、権力関係そのものを再生産する
 - ・「妥当」の手続き
 - i 分離の儀式（まつりごと） 儀式と組織は、当初結びついていた
 - ii 組織の編成（関係の恒常化・可視化）
 - ・権威：設定された権力空間のなかで、権力線の（上流の）端点であると認知される点 権威が実在して権力が派生するのではない
- あらゆる関係が権力関係に転化しうる前駆形態であり、そこから権力が編成される

§ 権力はどのように営まれるか

- ・権力の意図的な行使は、権力についてのメタ知識を必要とする
 - ・権力が存在するという前提にもとづく人びとのふるまいを、権力ゲームをよぶ
- 権力ゲームのなかで、権力手段や権力資源は実在しはじめる
- 権力ゲームのなかにも、外にも、権力線は走っている
- Thある権力ゲームの成立を、そのゲームのなかに実在する権力は保証しない
- 逆に、ある権力ゲームのなかに、その権力を解除・失効させる積極的な契機はない
- ・権力ゲームは、i 他の権力ゲーム
 - ii 他の、権力を含意する類似のゲーム（たとえば宗教）
 - iii 他の、権力を解除することを主題とするゲーム（たとえば民主主義）
- によって挑戦され、相対化される

§ 言語ゲームと権力（略）

超産業社会と21世紀の課題

橋爪大三郎（東工大）

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月より、大学院社会理工学研究科VALDES専攻新設予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション（全3巻）』（以上、勁草書房）、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』（以上、講談社）、『崔健』『性愛論』（以上、岩波書店）、『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）、『自分を活かす思想／社会を生きる思想』（共著、径書房）、『小室直樹の学問と思想』（共著、弓立社）、『大問題！』（幻冬舎）、『橋爪大三郎の社会学講義』（夏目書房）、『科学技術は地球を救えるか』（共著、富士通ブックス）、『新生日本』（共著、学習研究社）、『近代国家とオウム（仮題）』（共著、南風社・近刊）ほか。

□1□ 超産業社会はどのような社会か

1) ビル・ゲイツの予言：「情報ハイウェイ」時代の到来

- ・計算コストの劇的低下→パソコン革命 通信コストの劇的低下→情報通信革命
- ・いつでも、どこでも、誰とでもコミュニケーションが可能に
- ・組織／一般社会、都市／農村、職場／家庭、学校／地域社会、……の輪郭が曖昧に

2) レスター・ブラウンの予言：環境制約（地球温暖化）の深刻化

- ・石油資源、天然ウランの枯渇→エネルギー価格の高騰
- ・石炭資源（化石燃料）の限界 ∴硫黄酸化物の生成
- ・熱縮（温室効果によるエネルギー消費の各国別割当て）→エネルギー価格の高騰

3) マルサス→ローマ・クラブの予言：食糧不足の深刻化

- ・発展途上国人口の幾何学的急増と、食糧生産の伸び悩み→食糧価格の高騰
- ・飢餓と貧困の拡大 局地紛争の頻発 →世界規模での資源（土地）再分配要求

4) 情報価格↓×エネルギー価格↑×食糧価格↑（資源／情報ギャップの拡大）

：世界のことはよくわかるようになるが、問題は解決できない。

⇒①先端科学技術がフロンティアに、②過激新宗教が蔓延、③思想の閉塞状態は継続

□2□ ポスト冷戦世界はどのような世界か

1) 世界単一市場の形成

- ・ブロック経済 →自由経済／計画経済 →世界大の単一自由市場
- ・国際分業のやり直し 日本は新たな比較優位産業を発見できずに迷走中

2) アメリカの相対的地位低下 21世紀初頭の経済順位：中国¹ アメリカ² インド³ 日本⁴

- ・中国（をはじめとする非欧米世界）の台頭 国際社会のルールをめぐる争い
- ・アメリカ＝基軸国体制 →集団基軸国体制（より不安定）に

3) 冷戦後遺症 民族紛争の再燃

- ・ロシア：解体から再編へ 朝鮮半島：統一のコストを誰が分担するか
- ・中国：共産党支配の終焉→独立運動の成功へ（チベット、台湾）

□3□ 21世紀の課題を考える

1) 環境破壊の深刻化

- ・炭素税 and/or 資源消費権の証券化（温室効果ガス排出権）の提案と、国際紛争
- ・植物蛋白消費運動～日本が主役に？

2) 広がる南北格差

- ・所得向上&教育→人口増ストップ ∴発展途上国のすみやかな経済発展をはかるべき
- ・食糧価格の高騰→穀物の適正分配（配給）に関する国際協定 財源は国際消費税？
分配の根拠に、人口抑制率を入れるかどうか争点に

3) 国際標準と固有文化の衝突

- ・イスラム法×近代法 ・カースト制×人権思想 ・伝統中国×民主主義
- ・固有文化×西欧近代 西欧起源の国際標準はデファクト・スタンダードで根拠なし

4) 先端科学技術と社会変動

- ・生命科学の進展（老化の科学的解明）→先進国における長命現象 南北格差の拡大
- ・情報科学の進展（音声即時自動翻訳）→英語優位の終焉 言語バリアの消失→統合へ
- ・物質科学の進展（新たなエネルギー源の獲得）→地球外生産基地の建設へ

5) 新たな安全保障体制へ

- ・核兵器拡散の危険がますます増大 核爆弾（ゲリラ）、核ミサイル（冒険主義国家）
- ・核攻撃に報復する大国の軍事同盟（国際核の傘）が必要 中国・インドの参加が鍵
- ・途上国からの大量の経済難民を処遇する国際協定 経済難民の発生を抑えている国に、一定の割合で先進国への移住権を分配（当事国の取締りを期待して）

6) 日本の21世紀戦略

- ・「科学技術創造立国」路線 独創性&言語バリアの突破&高品質&低価格&実用性
- ・日本を「文明」に格上げするための思想闘争 戦国時代の日本人を思い起こそう

□3□ 社会学を、どうやって学ぶか

- 1) 経験で社会を学ぶ限界 ①自分の社会しかわからない、②自分の立場しかわからない
→ 経験を相対化して、方法的・体系的に学ぶ必要 → 自分の固定観念を打ち砕く!
- 2) 異なる社会についてのデータを入手 情報源=書物を重視すべき(安い)
過去の社会~歴史・宗教/異なる民族~人類学・旅行/異なる集団~書物・体験
- 3) 合理性・体系性(つまり理論)を重視すべき
・データを整理するために、とことん理屈で考えてみる なぜ?の連発
・過去の学者の業績を参照 マルクス、ヴェーバー、デュルケム、ジンメル
- 4) 冒険の精神で、社会を生きる
・上田紀行さん(人類学)のゼミ 例)男女が服装を取り替えて、異性を口説く練習
・島田裕巳さん(宗教学)のゼミ 例)統一協会やオウム真理教の信者と接してみる
・私(社会学)のゼミ 例)中国研修旅行に出て、日本を外側から眺める
- 5) 制度は変わる⇒社会を変える
・社会学の存在理由:社会の実態について知る→社会をよりよく変える提案をする
・政治学・経済学・法学……との協同作業が必要 いまの学問態勢では不十分
そのためには……
・書物(誰かの考えたこと)をよくよむ(ただし、あまりまともに受け取らない)
・友達と討論する(討論できない友達は、友達でない!)
・就職、結婚、親とのつきあい、……自分の人生の選択を、自覚的に行なう(+責任)
常識にとらわれたまま人生を送っても、いまさらちっとも面白くない!
- 6) 社会学がよくなれば、社会は変わる
⇒ 社会学科に進んだみなさんの任務は重い

1) ×大学は、文部省に属する ×大学は、小中高校の延長である
⇒ ○大学は、人類の知的共同体 大学は近代国家より古く、民族を超えている

2) 大学＝古典（聖典）を読むところ イスラム教徒（法学者）の学校（9世紀ごろ）
→イタリアの法学部（12世紀）→神学・医学・法学・哲学→自然科学（17世紀～）

3) universityを「大学」と訳したのが誤解のもと 大学～四書の一→役所の名称
大学の世俗化：大学が自然現象（＋社会現象）を研究（科学）しだした cf. Ph. D

- 1) 科学……ものごとを、体系的・組織的・合理的に研究する 研究：知識の生産&継承
実証：知識を経験のなかで検証すること 正しさの規準～○客観的世界 ×神
- 2) 実験……条件を制御しつつ現象を観察 cf 観測～条件を制御しないで現象を観察
実験は再現性がある→自然現象は法則性がある（時間・空間を超えている）
- 3) 真理……人間が確認できる世俗的知識 理性～ $1+1=2$ 部分に分け、全体を再構成
社会現象は実験ができない →観測・比較を駆使（社会現象にも法則性がある）

1) 社会学は、社会科学(social sciences)のひとつ
社会科学は、研究の対象で分かれている cf 自然科学は、現象のサイズで分岐

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月に、大学院社会理工学研究科VALDES専攻新設。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『自分を活かす思想／社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『わが国を救うための社会学入門』(別冊宝島)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『社会学がわかる』(AERAムック)ほか。

□1□ 言葉と思考

1) Q ひとは、言葉なしで考えられるか?

Q' 言葉なしで考えた、事例をみつけることができるか? cf. 類人猿の知恵試験

Q'' そもそもQに対して、言葉なしで答えることが可能か? (≡“言葉なしで考えることができる”と、言葉で主張することができるか?)

Q''' あなたは、自分が言葉を覚える前のことを、考えられ(思い出せ)るか?

2) ひとは、言葉(のみ)によって、思考を営んできた。

Q それでは、数学とはなにか? 数学は、言葉の一種なのか?

思考は、言葉によって住まわれている。

Q 聾啞者のことを考えてみよう。聾啞者の手話は、言葉なのか? それは、どのように言葉なのか?

3) 思考と言葉とは、別々のものとして単独に存在できない。

思考がまずあって、言葉に表現されるのではない。思考は、言葉を使って営むなにごとかである。言葉を操るそのことが、思考にはかならない。

操ること=思考 操られるもの=言葉

□2□ 言語ゲームとは何か

1) 言葉には「意味」がある。「意味」は、ルール(=規則)に支えられている。

Q 「意味」とは何か? 言葉が指し示すものか? 言葉が喚起するイメージか?

Q ルールとは何か? ルールは観察可能か?

行為にも「意味」がある。行為も、ルール(=規則)によって支えられている。

Q 行為の「意味」と言葉の「意味」は、同じか?

Q' 言葉のルールと、行為のルールとは、同じか?

2) 言葉の「意味」は、理解を通じて現れてくる。理解は、思考の基本的な機能である。

理解とは、あることが「わかる」ことである。

Q 「わかる」ことと、わかると「思う」こととは、同じか違うか?

3) 「わかる」とは、「ルールに従うことができる」ことである。

Q ルールに従うために、ルールを記述できる必要があるかどうか?

ルールに従う～言葉をしゃべる ルールを記述する～文法を知っている

「わかる」とは、つぎの数列を続けることができること:

2, 4, 6, 8, 10, ……(以下、同様)

Q この数列を見て、「あっ、わかった」と思うか? それは理解を保証するか?

Q この数列の続け方は、ひと通りか? もしくはつかあれば、どれが正しいか?

4) ヴィットゲンシュタイン(Wittgenstein, Ludwig 1889-1951)によれば、

i) 人間の営みは、すべて言語ゲームである。

ii) 言語ゲーム一般について、客観的に語ることはできない。

さらに、橋爪によれば、

iii) 言語ゲームは互いに、記述する、包含する、……などの関係がある。

思考もまた、言語ゲームのひとつであることになる。

□3□ 思考の作法とは何か

1) 思考はどのように、自らを組織するのか

・何を考えてもまったく自由である →思考がランダムウォークのようなものであれば、それは「まとまったこと」(思想)をのべられない →世界に秩序があるのなら、思考に秩序があってもよい(世界のことを考えるため)

・自分の内部の、思考と思考の関係 ・論理(一貫性)・バランス(理性/感情)

・自己/他者の、思考と思考の関係 ・影響 ・論争 ・共感/反感

Q 他者の思考を、自分の思考と同じように手にとるように理解できるか?

・思想(Σ思考)を伝達する装置としての、テキスト ・固定的、一方向

Q 自分の書いたテキストと、他者の書いたテキストは、どこが本質的に異なるか?

Q 自分のテキストに他者のテキストを「引用」したら、思考はどういう関係にある?

2) 思考を組織する方法

* 論理 →理論: 特定の前提から出発する論理整合的な体系

* 科学: 理論を実証によって確証する運動 なにが正しいかは人間が決める

* 宗教: 真理を実証しないで確信する運動 なにが正しいかは神が決める

* 法(慣習)/伝承/文学/報道/……

3) 思考のマナー

思考のマナー: 自分がどのように思考を秩序づけ、発展させているかという原理(思考のルール)を、自分にも相手にも明らかにすること。

→人格的統一性(personal integrity)

言説のマナー: 証言(十戒) 守秘義務 ・言葉の管理者は神である

cf. 仏教の妄語戒(嘘を無限定に禁止～嘘は全面禁止ではない～努力目標)

4) 思考をよりよく発展させるために

・人は思考しつつ生きる →よりよく思考することは、よりよく生きること

・ものを書くこと=思考を対象化すること(→他者の接近・批判を許す)

・プロの思考家≡プロのものの書き

≠思想家: 思想(汎用性・耐久性・普遍性のある思考の秩序)を生み出す人間

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月に、大学院社会理工学研究科VALDES専攻新設。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『わかりたいあなたのための社会学入門』(別冊宝島)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『社会学がわかる』(AERAムック)ほか。

□1□ 政治はなぜおもしろくないか

1) 戦後の選挙は、結果がわかっていた。

- ・アメリカとの同盟を維持するために、社会党〜共産党に政権を渡すことはできない
- ・戦後民主主義を守るために、改憲勢力に国会の三分の二を与えることはできない
- ・中選挙区選挙では、マイナス・ワン(貧乏クジ)投票となる ⇒ 派閥均衡
選挙民と関係ない、候補者(および彼らと結びついた利害関係者)の利害の争い
⇒ 自分たちとは関係ないや、というあきらめ

2) 結果がわかっている選挙=儀式

- ・選択肢がない……政策は官僚が決める; 候補者は政党が決める; 政権交替はなし
- ・論争がない……イデオロギーはただの信仰表明; 論争するのは多数派でない証拠
- ・興奮しない……討論→説得→なだれ現象、が起きない; 事前運動・個別訪問禁止

□2□ 政治とはなにか

1) 政治とは……〔定義〕関係する人びとを拘束することがらを、決定すること

決定=「不確定なことを、確定したことに変換する操作」

- ・政治とは(集合的な)意思決定である。⇒選挙も(集合的な)意思決定である。
⇒決定の前には、結果が不確定でなければならない。〜スリリング〜正統性の創造

2) 政治的決定=Σ(個人の)決断 一人ひとりの意思決定の集積が、政治的決定

(個人の)決断と、(集団の)政治的決定とは、同型である

ただし、個人の決断が合理的であったとしても、集団の政治的決定が合理的であるとは限らない(投票のパラドックス)

3) 政治的決定が、十分に機能を発揮しないとしたら

- ・個々人の意思決定が、独立でない場合(⇒決定の正統性が失われる)
- ・集計(Σ)の方法が、恣意的である場合(⇒やはり決定の正統性が疑われる)
- ・個々人がそもそも、意思決定を行なわない(決定の責任を回避する)場合

4) 政治的決定をしないのが、最高の政治的決定 ……日本の伝統的な政治文化

- ・誰かが政治的決定をする⇔誰かが決定から排除される 決定の突出を嫌う
- ・誰が決定したかわからないようにする ~決定した人間の安全&従った人間の安心
- ・トップは、ある決断を下さざるをえないような状況がうまれるのを待つ
部下は、トップの意向を忖度しつつも、決定を有利な方向に導こうとする

□3□ 政治はどうすれば、おもしろくなるか

1) 政治……人が人を支配すること

一神教: 神が人を支配する ⇔人が人を支配するのは正しくない ⇔法の支配

儒教・法教: 人が人を支配するのは当然 ⇔天→天子→官→吏→…の階層構造

日本教: 人が人を支配するのは避けたい ⇔同意(反対のないこと)を重視

一神教では、神をいかに信じるか(人をいかに信じないか)がテーマ

日本教では、人をいかに信じるか(制度や法や言論をいかに信じないか)がテーマ

2) 日本教の政治システムに、限界が見えてきた

- ・「人を信じる」関係は、ミクロな関係で、推移律が成り立たない ∴マクロは不適
 - ・「決定をしない」政治は、不透明で、時間がかかる ∴組織の機敏な運営に不適
- 日本の政治文化(日本人の行動様式)を改革する 日本人も危機感があれば変わる

3) 金の改革 政治に金がかかることを前提にする

その金をどうやって集めるかを柱に政治を設計

政党交付金は悪法→廃止 身銭を切る/党員チケット制/予備選挙/次点歳費制

4) 人 有能な人間をリクルートするシステム+やめた政治家の再就職

予備選を活用 下から勝ちあがり 議会の法案作成能力の強化

5) 情報 意思決定に必要な情報を、誰でも手に入れられるようにする

議員についての情報を、有権者は誰でも手に入れられるようにする

誰が意思決定をしたのか、その結果はどうなったか、その責任は誰にあるのか、をはっきり記録する 誤った決定を行なった政治家は、その地位を失う(信賞必罰)

6) 名誉 政治が、青年にとって魅力ある職業として、選択の対象、人生の目標と

なることが大切 リスクが大きいだけに、報酬も多くあるべき

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月に、同大学院社会理工学研究科VALDES専攻新設。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『わかりたい人のための社会学入門』(共著、別冊宝島)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『平成じゃないか体宣言』(メタログ社、近刊)、『研究開国』(共著、富士通ブックス、近刊)ほか。

□1□ 言葉とはなにか?

- 1) 言葉とはなにかを考えること…… それは意味がないかもしれない。
 - * 言葉とはなにか、誰でも知っている。なぜなら、みな言葉を使っているから。
 - * 言葉とはなにかを考えるには、言葉を使わなければならない。 ?!
- 2) 言語学によれば…… 音声記号 (SA シニフィアンと SE シニフィエの結合)
～ソシュール Ferdinand de Saussure 『一般言語学講義』(1917)
 - * 文字言語は、二次的である。 Q身振りは? Q手話言語は? Q動物の言語は?
 - * 言語記号は、恣意的(arbitraire)である。 言語記号は、実体を持たない。
 - * 言語は、対立のシステムである。 言語記号は、差異のみからなる。
- 3) 哲学によれば…… それ自体を根拠づけることのできないふるまい(用法)
～ヴィトゲンシュタイン Ludwig Wittgenstein 『哲学探究』(1957)
 - * 人間のふるまいは、言語ゲーム(language game)。それは、規則(rule)にもとづく。
 - * 言葉の意味は、その用法に存する。それは理解できる。 「考えるな、見よ!」
- 4) とりあえず言えることは…… 言葉は、①目の前にない対象を指し示することができる。
②目に見えない対象を指し示することができる。③人間の抽象的な思考を可能にする。
 - * 言葉をもつことによって、人間は人間的な思考と行動ができるようになった。
 - * 言葉をもつことによって、家族/道徳/倫理/宗教/法律/文明が可能になった。

□2□ 言葉はなにを可能にするか?

- 1) 言葉と、ひとりの人間個人(主体)の関係…… 「主体」は言語を基礎づけられない
 - * 伝統哲学のなかで、言語はうまく位置づけられてこなかった 主/客図式の限界
 - * 「わたしがいるから言葉がある」のではない、「言葉があるからわたしがいる」のだ。
 - * 言語は、「間主観的」「間身体的」な存在である
- 2) 言葉には、他者の思考が刻まれている ～ 言葉には、自分の思考が刻まれている
 - * 受話: 他者の思考が言葉のかたちをとって、自分にやってくること
 - 発話: 自分の思考が言葉のかたちをとって、自分から離れていくこと(離す=話す)
 - * 受話/発話が分離することで、他者/自己の関係が分離して保たれている
 - 分離しない～精神症状 考想化声、幻聴など 自/他の思考が未分化

3) 言葉のなかで、現実が生まれる

- * 仮定 もし～ならば、～だ 反実仮想 もし～ならば、～だったのに
- * 感情表現&態度表明 痛い 愛している ☆「嘘」の可能性 ?!
- * 命令 あるべき状態をまずおもしろい描き、相手に伝える
- * 約束(契約) あるべき状態をまずおもしろい描き、それに合わせて行動する
- * 引用や言及(メタレヴェルの用法) あるがままの世界から思考が独立する
- * 責任/冗談/伝聞/神話/伝承/論理/死/神/… ～オースティン『言葉と行為』

4) 言葉を共有することによる共同体の形成

- * 言葉を共有する～現実を共有する～文化を共有する 人びとが共にあることの条件
- ひとはみな、言語による共同体の一員として生み落とされる
- ⇒言葉を共有しないことによる、敵対関係の形成

□3□ 言葉をやりとりする他者とはなにか?

- 1) 哲学の結論…… 他者の存在証明は困難である
 - * (1)この私はたしかに存在する、(2)他者をこの私と同等の存在と定義する(他者にとって他者自身は「私」である)、(3)この私は唯一である、(4)ゆえに他者は私と同等でない(この私でない)。
 - * 他者の存在証明が困難なのは、私の確実さを基準にその証明を試みるため
- 2) 他者は言葉と共に、直接私に与えられる →その証明を試みるのは、倒錯している
 - * 言葉を交わす関係は、社会のもっとも根源的なあり方である
 - * 他者は言葉のなかで、私と置き換え可能である あなた/私 人称構造の対称性
 - * 私は刻々、他者の存在を前提にしてふるまっている 他者は私の存在の一部である
- 3) 私は絶対的存在でない ・自分が生まれた経緯を、他者たちは知っている
・自分が死んだあとも、他者たちが生き延びていくだろう
 - * 他者たちがいるおかげで、私の生きる意味が、客観的なものになる
 - 私がどんなに自分の生きる意味を考えても、それが他者に届かないなら何になる?

□4□ ひとが言葉を用いることの尊厳とはなにか?

- 1) 言葉を用いることは、世界についての報告でもなく、現実についての感想でもない。
それは、言葉を用いたふるまいである。他者や自分と本質的に関わる行為である。
 - * 言葉を正しく用いることは、他者を信じること、社会を真剣に生きること。
- 2) 会話の倫理…… 他者から発した言葉を自分が受けとめ、自分が発した言葉を他者が受けとめる。 言葉の交流の回路のなかで、人間は自分が生きる意味を理解する。
 - * チューリング・テスト: 相手が人間であるか機械であるかの判定法 ～自然な応答
 - * 言葉は、自分が他者によって生かされ、自分は他者のために生きるという根源的体験
- 3) 書物…… 人びとが共同で現実(歴史、宗教、文化)を構成しようとする試み
 - * 自分の不在と引き換えに、生き続けるわれわれに届けられた、過去からの知恵の光
 - * 文明社会の制度は書物で作られる 書物に関心がないのは、他者に関心がないこと
- 4) 言葉を用いることは、ひとが人間であることの証である
 - * ひとは、言葉を理解し話すようにつくられている Cf. チョムスキー「言語能力」
 - * ひとの一生は、同じような他者たちと、言葉を通して精一杯関わり続けること
 - * よりよく言葉を用いれば、それだけよりよく他者と関わることになる
 - * よりよく言葉を用いるには、言葉と現実との「ギャップ」を常に埋めていく必要あり
 - * 言葉と現実とのこうした緊張に、自分をさらしていくことが、この世界の意味に幅と広がりを与える

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院博士課程(社会学)修了。1989年より東京工業大学に勤務。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻(VAIDES)発足。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『近代国家とオウム』(共著、南風社)、『こんなに困った北朝鮮』(メタログ社、近刊)、『研究開国』(共著、富士通ブックス、近刊)ほか。

□1□ 社会のかたちとは、どのようなものか

1) 社会構造(social structure): 社会現象のうち、相対的に変化しない部分

～具体的には、行動のパターン(文化)や、それを制度化したもの(法、宗教、組織など)を指す

2) 文化としての社会構造……親族構造(kinship structure) 父系/母系/双系社会

文化が変化しにくいとしても、まったく変化しないわけではない

- ・文化変容(acculturation): 高級文化が、接触した社会の文化に影響を与えること
- ・文化→文明へ 文字、法、宗教、商業、軍、帝国 共同体の解体と重層 朝貢

3) 制度としての社会構造 制度: 文化を記述し、標準化し、普及する戦略

文化と文化が交錯するとき、文化のデファクト・スタンダードをめざす

宗教→法→統治機構 人びとを共通フォーマットに従わせるのが目標

4) 知識としての社会構造 知識: 文化や制度を記述し、情報化し、洗練する

たとえば、「社会のかたちを考える」作業は、このような知識の一種である

思想: 制度(人為的な社会のかたち)のあるべき姿を考えること

□2□ 日本のかたちは、どのように作られたか

1) 周辺地域としての出発

基層→縄文+弥生 双系社会

表層→中国文明 儒教=仏教複合(律令制度、仏教、文字、建築、医学、……)

島国711ヶ……侵略や移住にさらされるほど近くなく、影響を受けないほど遠くない

2) 周辺地域としての成熟

日本の変容(表層×基層)⇒中世封建制

森林開発にもとづく労働集約的農耕 契約にもとづく武装騎士集団(=西欧)

西欧的変容の場合、周辺地域から新たな中心が生成したが、日本は違った

3) 周辺地域としての再出発

中心→西欧文明 周縁→日本 もっと周縁→韓国・中国・アジア ⇔再定位

・明治維新……中心→欧米列強 日本は列強と同位対立 天皇=絶対専制君主

・昭和初期……中心の分裂(欧米/ドイツ/ソ連) 国粋ナショナリズムの高揚

・戦後期……中心→アメリカ 日本はアメリカに従属 アイデンティティの混乱

・ポスト冷戦期……中心の分裂(アメリカ/中国/欧州) ???

⇒戦後期の遺産を清算 「普通の国」に

□3□ 日本のかたちを、どのように構想するか

1) 国際環境の変化 二極対立 ⇔アメリカ一極=多極世界 ⇔米中二極=多極世界

経済重心、政治重心がアジアに移る GNP: 中国>アメリカ>インド>日本…

アメリカを上を戴く関係(戦後期)から、水平の関係(明治維新に類似)に回帰

2) 地球環境の悪化

・広がる南北格差 自由(既得権益擁護)vs平等(結果の平等)の再燃

・資源ネックの深刻化 人口問題、炭酸ガス・地球温暖化、貧困と飢餓、紛争激化

3) 安全保障 →極東有事に備えよ

・朝鮮戦争……独立以前。アメリカの統治下、日本は安全を一切心配する必要なし

・ベトナム戦争……沖縄は施政権返還以前。嘉手納から北爆に出撃しても日米安保の枠外 保の枠外

北朝鮮……冷戦の枠をはなれた暴走可能性(イラクの暴走→湾岸戦争と類似点あり)

・アメリカのプレゼンスを支援する(安保再定義)→軍事冒険主義を封じ込める

・北朝鮮再建計画 合併銀行設立→国営企業の査定→経済再建計画の作成?

中国……国際標準(市場経済)と国内特殊事情(社会主義)の併存→やがて限界に

4) 国内改革 →明確な反対がないのに、どの改革も成功しない

組織合理性vs日本的慣行 例)閣議の全員一致制(=各省庁の拒否権)

日本的慣行: 組織を(擬似)共同体とみなすこと→環境一定、規模拡大のもとで可能
組織合理性:

・政治改革(選挙制度改革、国会の機能強化) コンセプトにより現実を設計

・行政改革(議会・予算による行政のコントロール)

5) 「科学技術創造立国」

・教育改革 大学定員を廃止し、入学より卒業をむずかしくすること

個々人が自分に自信をもち、個々人の差異を支援するようなシステムを

・研究開国 大学・研究機関を国際化する(国際標準で運営すること)

・思想改革 国家運営・世界経営のための哲学・価値観・知識を錬磨すること

6) 財界がそのためにできること

・経済合理性の追求 国際標準による企業運営

・長期的視点 文明としての産業社会

海を越えるポピュラー・カルチャー

橋爪大三郎（東京工業大学・社会学）

□1□ 文化とは何か

- [illegible]

□2□ 国境を越える文化

- 1) 人の移動 商品の移動 文化をたずさえた移民は、マイノリティー文化を形成
商品単品として、文脈を読みかえられて移転する
- 2) 言葉の壁 料理・音楽・ダンス・絵画・アニメ ——— 文学・思想・宗教
- 3) 世界大メディアの発達 映像、文字情報、即時性
- 4) 国境を越える音楽：カラオケの場合

TRANSNATIONAL POPULAR CULTURE
 ~~~~~

Daisaburo Hashizume

(Sociology /Tokyo Institute of Technology)

□ 1 □ What Is Culture ?

- 1) the concept of "culture"
  - high culture : the fine arts, music, literature, ... all sophisticated forms of men's activity (and its products)
  - ↓ (expansion)
  - culture : patterns of behaviour of the members of some society
  - this concept of culture was elaborated in cultural/social anthropology.
- 2) civilization : higher state of culture, which develops letter, law, religion, market economy, high culture &c.  
civilization is usually a hybrid of several cultures.
- 3) culture diffusion : a flow of culture from one society to another  
(influences) center/periphery
- 4) acculturation : the process of disorganization of some culture under the influence of another culture (or civilization)
- 5) culture of modern national state  
standardization of culture ... education, language, money, law, &c.

☐2☐ Transnational Culture

- 1) information transfer > transportation of commodities > migration of people  
music, image, fashion car, brand items,
- 2) language barrier food, music, picture, cinema — literature, religion,  
(popular culture) thoughts
- 3) world-wide media visual image, data transfer, internet real time  
world music exoticism × relativism × snobbism
- 4) "karaoke" was invented in Kobe(≒Chicago), the city of Yamaguchi-gumi gang.  
( → will be discussed on the symposium at Kanazawa on 24 August)

□0□ 講師紹介

はしづめ だいさぶろう 1948年生まれ、東京大学社会学研究科博士課程修了

東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻勤務

著書：『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『はじめての構造主義』『橋爪大三郎の社会学講義』『現代思想はいま何を考えればよいのか』他

共著：『新生日本』『自分を活かす思想/社会を生きる思想』『オウムと近代国家』他

□1□ 危機(リスク)とはなにか

1) 「思いも寄らないこと」のパラドックス

\* Q “五つの扉のどこかに虎が隠れていて、思いも寄らないところから飛び出してくる”

A “最後の扉でない→その前でもない→そのまた前でもない→……→どこにもいない”

結果：順番に扉を開けていったところ、思いも寄らない3番目の扉から虎が出てきた

\* ほんとうに「思いも寄らないこと」は、予測可能なかたちに定式化できるのか？

2) 危機/日常 日常：予測可能な範囲内で、しばしば起こる事態

危機：生起する確率は小さいが、いったん生起するとその影響は大きい

3) 危機は、組織の成立とうらはらの関係にある

\* 組織：人びとの相互作用をある予測可能な恒常的パターンの範囲内にとどめ、日常の業務を効率よく行なうための機構 分業～ルーティン～権限

\* 組織は、日常業務を行なうのに適しているが、予想を超えることがらには不向き  
組織の効率を高める⇔危機に対応する能力は低下する

4) 危機に対応するのを専門とする組織を作る……一般的な危機管理のセオリー

\* 警察/消防/保健所/…… 政府の機関として、個別の内政課題を担当

\* 軍隊(危機管理能力は高い) 政府の代替機関として、統治行為の全般を担当

\* 危機に対応するのが専門の組織といっても、それは、ほかの組織の危機に対応するという意味であって、自分の組織の危機には必ずしも対応できない

□2□ 日本人の危機感

1) 社会的危機の不在

\* 都市国家が成立しなかった 都市国家～定住民の防衛施設 民族殲滅戦が前提  
日本 ～ヴェーバー都市社会学の、例外 ←→万里の長城、……

\* 日本の城郭は、戦闘施設であって、都市防衛機能を持たない 住民の中立を保証

2) 自然的危機は一過性

\* 台風、地震、火事 それを防ぐことが不可能、またはコストが高い

\* 恒久的建築物をなるべく作らない 一国一城制：独立した経済圏や建造物を排除  
日本が模倣した隋唐帝国は、森林資源がまだ豊富で、木造建築主体だった

3) 官僚制的軍隊の未発達

\* 律令の軍制は解体し、かわりに同族的～共同体的結合が優位する →家制度に発展

\* 「自分の所属する集団」(共同体)が、社会防衛～意思決定の基本単位になる  
共同体……役割分化が未発達(変更可能)、面識関係(職務権限があいまい)、目的が限定されない(その存続が至上命令)

\* 特攻隊、内務班、警察とヤクザ、家(武士)の自己武装権、……

4) 終末観の不在 ←→神教は、最後の審判、ハルマゲドン、ノアの洪水、そのほかの破壊と再生のストーリーを必須とする。

\* 自然宗教的汎神論～仏教の日本化(神道との混習)～キリシタンの排斥

\* 共同体原理は、自己責任原則が不明確 ←→個人救済(キリスト教、イスラム教)

□3□ 現代日本のリスク管理

1) 危機管理の本質：最悪の状況でも最善の行動をすること

なにが最善であるかは、①状況に応じて異なる、②検証が必要である

\* 最善の行動……(1)時間をかけずに、すばやく行動する(通常の手続きを省略する)  
(2)結果として、時間をかけたのと大差のない効果を収める

⇒事前に(通常の手続きのなかで)「最悪の事態」を想定し、どのように行動するか  
のマニュアルを用意しておく(アメリカ流の危機管理術)

2) 危機管理への抵抗感 ・通常の手続きを省略することに対する抵抗

・危機(通常でない状態)を明確に意識することに対する抵抗

\* 日本の組織文化が、トップダウン(欧米型、中国型)になじまない

3) 法の支配の不徹底(契約の不在)

\* 人びとや組織の行動を、言語によって記述しコントロールすることへの抵抗

⇒危機を「記述」することが困難である cf. 危機を「記述」すると危機がやってくる

\* リアリズムの欠如 言葉はひとが、現実と直面しないためにある

4) 長期的視点(共同体を外から眺める視点)の欠如

\* 人びとは、共同体に依存しながら、じつは共同体が存続するための条件を真剣に考えていない このことは、戦後日本全体についてあてはまる

\* 思想の欠如 思想：人間や社会のあらゆる多様なあり方をカバーする知識

## 日本の明日を考える

橋爪大三郎（東工大）

### □0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻発足。  
著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション（全3巻）』（以上、勁草書房）、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』（以上、講談社）、『崔健』『性愛論』（以上、岩波書店）、『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）、『自分を活かす思想／社会を生きる思想』（共著、径書房）、『小室直樹の学問と思想』（共著、弓立社）、『大問題！』（幻冬舎）、『橋爪大三郎の社会学講義』（夏目書房）、『科学技術は地球を救えるか』（共著、富士通ブックス）、『新生日本』（共著、学習研究社）、『近代国家とオウム』（共著、南風社）、『研究開国』（共著、富士通ブックス・近刊）、『こんなに困った北朝鮮』（メタログ・近刊）、『宗教社会学講義（仮題）』（径書房・近刊）、ほか

### □1□ 超産業社会がやって来る

#### 1) ビル・ゲイツの予言：「情報ハイウェイ」時代の到来

- ・計算コストの劇的低下→パソコン革命 通信コストの劇的低下→情報通信革命
- ・いつでも、どこでも、誰とでもコミュニケーションが可能に
- ・組織／一般社会、都市／農村、職場／家庭、学校／地域社会、……の輪郭が曖昧に

#### 2) レスター・ブラウンの予言：環境制約（地球温暖化）の深刻化

- ・石油資源、天然ウランの枯渇→エネルギー価格の高騰
- ・石炭資源（化石燃料）の限界 ∴硫黄酸化物の生成
- ・熱縮（温室効果によるエネルギー消費の各国別割当て）→エネルギー価格の高騰

#### 3) マルサス→ローマ・クラブの予言：食糧不足の深刻化

- ・発展途上国人口の幾何学的急増と、食糧生産の伸び悩み→食糧価格の高騰
- ・飢餓と貧困の拡大 局地紛争の頻発 →世界規模での資源（土地）再分配要求

#### 4) 情報価格↓×エネルギー価格↑×食糧価格↑（資源／情報ギャップの拡大）

：世界のことはよくわかるようになるが、問題は解決できない。

⇒①先端科学技術がフロンティアに、②過激新宗教が蔓延、③思想の閉塞状態は継続

### □2□ ポスト冷戦世界はどのような世界か

#### 1) 世界単一市場の形成

- ・ブロック経済 →自由経済／計画経済 →世界大の単一自由市場
- ・国際分業のやり直し 日本は新たな比較優位産業を発見できずに迷走中

#### 2) アメリカの相対的地位低下 21世紀初頭の経済順位：中国<sup>1</sup> アメリカ<sup>2</sup> インド<sup>3</sup> 日本<sup>4</sup>

- ・中国（をはじめとする非欧米世界）の台頭 国際社会のルールをめぐる争い

- ・アメリカ＝基軸国体制 →集団基軸国体制（より不安定）に

#### 3) 冷戦後遺症 民族紛争の再燃

- ・ロシア：解体から再編へ
- ・朝鮮半島：統一のコストを誰が分担するか
- ・中国：共産党支配の終焉→独立運動の成功へ（チベット、台湾）

### □3□ 21世紀、世界と日本の課題を考える

#### 1) 環境破壊の深刻化

- ・炭素税 and/or 資源消費権の証券化（温室効果ガス排出権）の提案と、国際紛争
- ・植物蛋白消費運動～日本が主役に？

#### 2) 広がる南北格差

- ・所得向上&教育→人口増ストップ ∴発展途上国のすみやかな経済発展をはかるべき
- ・食糧価格の高騰→穀物の適正分配（配給）に関する国際協定 財源は国際消費税？  
分配の根拠に、人口抑制率を入れるかどうか争点に

#### 3) 国際標準と固有文化の衝突

- ・イスラム法×近代法
- ・カースト制×人権思想
- ・伝統中国×民主主義
- ・固有文化×西欧近代 西欧起源の国際標準はデファクト・スタンダードで根拠なし

#### 4) 先端科学技術と社会変動

- ・生命科学の進展（老化の科学的解明）→先進国における長命現象 南北格差の拡大
- ・情報科学の進展（音声即時自動翻訳）→英語優位の終焉 言語バリアの消失→統合へ
- ・物質科学の進展（新たなエネルギー源の獲得）→地球外生産基地の建設へ

#### 5) 新たな安全保障体制へ

- ・核兵器拡散の危険がますます増大 核爆弾（ゲリラ）、核ミサイル（冒険主義国家）
- ・核攻撃に報復する大国の軍事同盟（国際核の傘）が必要 中国・インドの参加が鍵
- ・途上国からの大量の経済難民を処遇する国際協定 経済難民の発生を抑えている国に、一定の割合で先進国への移住権を分配（当事国の取締りを期待して）

#### 6) 日本の21世紀戦略

- ・「科学技術創造立国」路線 独創性&言語バリアの突破&高品質&低価格&実用性
- ・国際分業のなかに活路を見出す 日本市場→世界市場 企業行動の世界標準化
- ・日本を「文明」に格上げするための思想闘争 戦国時代の日本人を思い起こそう

#### 7) 日本の明日を支える企業を

- ・企業の多国籍化（資本・資源・人員の最適配置） 企業文化の多様化（能力社会化）
- ・中央省庁の規制弱体化、業界慣行の弱体化 資本主義機能の再強化 企業淘汰
- ・有望産業への集中的資金投下 ほどほどの企業へは資金を絞る

□0□ 講師自己紹介

はじめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月より大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授  
著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『性愛論』(以上、岩波書店)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『わかりたいあなたのための社会学入門』(別冊宝島)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『社会学がわかる』(AERAムック)ほか。

□1□ 人類は、水なしに生きられない

1) 生命と水

- ・“日本人は、水と平和はタダで手に入れている”～イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』
- ・生命は海のなかで発生 →細胞も血液も、海水(食塩水) →生命は水を必要とする

2) 社会生活と水

- ・水の用途……①飲料水、②炊事(料理)、③洗濯(家事)、④農業用水、⑤工業用水  
後者になるほど、需要が飛躍的に拡大する
- ・水は、社会生活に不可欠の資源 水なしに、都市も文明も営めない

3) 都市と水

- ・文明の発祥地～四大河川の流域～灌漑農業の適地
- ・都市(都市国家)は、丘の上、しかも水(飲料水)のあるところに建てられた  
上水道～飲料水 下水道～衛生のため ∴都市には人口密集

□2□ 水循環と文明

1) 地球環境・生態系と水循環

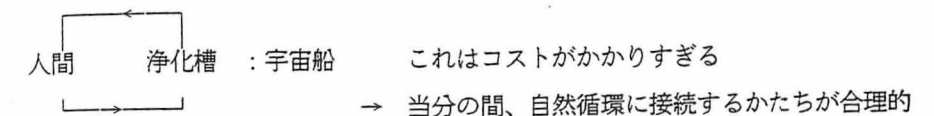
- ・地球環境はさまざまな循環(バランス)から成り立っている  
eg. 水循環、炭素循環(≒エネルギー循環≒食物連鎖)、窒素循環、……
- ・水循環: 海 →蒸発 →雲 →雨 →森林(→植物→動物) →河川 →海  
動物は、水・食物を摂取し、水・排泄物を排出する  
動物の排泄物は、アンモニア、硫黄化合物を含み、高栄養(微生物がさらに分解)

2) 文明～人為的な水循環

- ・上水道(自然水): 河川・湖沼の水や伏流水を、人間の居住区に導く
- ・下水道(雑排水): 土壌に還元する、河川に放流する、乾燥させる、……
- ・浄水: 水の自然循環(の一部)を、人工的な装置によって置き換えること  
浄水機能は、文明的な都市生活に不可欠である。
- ・浄水の形態や必要性は、生態系のあり方によって異なる

日本: 水が豊富で、早く流れる 自然浄化の機能が高い →日本料理  
中国: 水が少なく、ゆっくり流れる 水が腐りやすい →中華料理

3) 究極の水循環～宇宙船(水の閉鎖循環系)



□3□ 21世紀の、水と文明を考える

1) 地球環境破壊の進行

- ・地球温暖化 ←化石燃料(石炭)の消費増加 ←人口増加×GNP増大
- ・砂漠化 ←人口増加(たきぎを採る、放牧の増加)
- ・人口増加にストップをかけるのは、①教育、②GNP増大(経済発展)

2) 水不足の深刻化

- ・水需要の増大 i) 農業 ～耕地不足・食糧不足→新規農業用水の需要増加  
ii) 工業・都市化 ～水多消費型社会に  
iii) 緑化 ～乾燥地帯・砂漠に水を撒く大プロジェクトの必要性
- ・水は作れない ∴循環させるしかない(特に、iiの部分)

3) 第三世界の都市環境

- ・人口爆発(2050年には100億人突破!) →都市(スラム)への人口集中→衛生悪化
- ・先進国: 都市～農村連続体/後進国: 都市スラム集中/中国: 地方中小都市育成

☆浄化槽技術の国際協力

それぞれの気候風土に適合した浄化システムの開発

乾燥(焼却) 有機肥料還元 自然循環接続

- ・浄化槽は、集中下水処理に比較して、分散型で処理が簡単、大規模工事を必要としない、などの利点がある
- ・浄化槽を柱に、第三世界の水循環を技術支援すれば、人びとの生活を改善し、地球環境を守り、人類社会の平和と発展に貢献できる

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東工大学院社会学研究科博士課程  
修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年  
4月より大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授  
著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えれば  
よいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての  
構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新  
聞社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『崔健』『性愛論』(以  
上、岩波書店)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室  
直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会  
学講義』(夏目書房)、『わかりたいあなたのための社会学入門』(別冊宝島)、『科学技術は地球  
を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『オウ  
ムと近代国家』(共著、南風社)、『社会学がわかる』(共著、AERAムック)ほか。

□1□ 言語の科学的研究: その簡単な歴史

- 1) ソシュール (Ferdinand de Saussure 1857-1913): 現代言語学の誕生
  - \* 歴史言語学→一般言語学 『一般言語学講義』Cours de linguistique generale 1916
  - \* 共時態synchronique/通時態diachronique 参考: 丸山圭三郎
  - \* 言語langage = ラングlangue/パロールparole 『ソシュールの思想』岩波書店
  - \* 記号signe = 能記signifiant/所記signifie
  - \* 言語は、差異 difference の対立のシステム systeme des oppositionsである  
言語記号は、恣意的 arbitraire である ~考察の対象である言語を概念的に確定
- 2) チョムスキー (Noam Chomsky 1928- ): 生成文法の確立
  - \* 『文法の構造』Syntactic Structures 1958 (邦訳・三省堂)
  - \* 記号素、記号連鎖、言語=あらゆる記号連鎖の集合の真部分集合、書き換え規則、文  
法=言語に含まれる記号連鎖(のみ)を生成する規則の集合、ネイティブ・チェック
  - \* 有限状態文法finite state grammar/句構造文法phrase structure grammar/変形生  
成文法transformational generative grammar
- 3) ヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein 1889-1951): 現代言語哲学の創始
  - \* 『論理哲学論考』Tractatus Logico-Philosophicus 1929 写像理論
  - \* 『哲学探究』Philosophische Untersuchungen 1953 言語ゲーム language game
  - \* 論理実証主義logical positivism/日常言語everyday language 学派/分析哲学
  - \* オースティンJohn L. Austinの発話行為論 Speech Act Theory 『言葉と行為』1960
- 4) レヴィ=ストロース (Claude Levi-Strauss 1907- ): 構造主義を提唱
  - \* 『構造人類学』Anthropologie structurale 1958 『神話論理』Mythologiques 1963-71
  - \* 二項対立 binary opposition <構造> 参考『はじめての構造主義』講談社
- 5) フーコー (Michel Foucault 1926-1984): 言説分析を提唱
  - \* 『知の考古学』L'archaeologie du savoir 1969 参考『仏教の言説戦略』勁草書房
  - \* 言説 discours = Σ言表 enonce 言説編成 formation discursif

□2□ スケジュール

- 1) 10月4日 ガイダンス(本日)「言説編成とはなにか」  
10月11日は工大祭のため休み
- 2) 10月18日 「情報の言説技術論」 参考『橋爪大三郎コレクションⅢ』勁草書房
- 3) 10月24日〔
- 4) 11月1日〔
- 5) 11月8日〔
- 6) 11月15日〔  
11月22日は休講
- 7) 11月29日〔
- 8) 12月6日〔
- 9) 12月13日〔
- 10) 1月10日〔  
1月17日はセンター入試のため休み
- 11) 1月24日〔  
1月31日(予備)  
☆成績は、平常点(またはレポート)によって評価する予定です。

□3□ 言説編成: その演習

- 1) 課題図書
  - ①『ハディース』中央公論社 参考 ハッラーフ『イスラムの法』東大出版会
  - ②『神学大全』創文社
  - ③『史記』
  - ④『波羅提木叉』 参考 平川彰『戒律の研究』
  - ⑤『親鸞全集』
  - ⑥『共産党宣言』
  - ⑦『憲法集』岩波文庫
  - ⑧その他、各自が興味をもったもの
- 2) 方法
  - ・価値前提を抽出する
  - ・論理一貫性を検証する
  - ・説得の構造を分析する  
…… その他
- 3) 講義をとる予定の人は、アンケートに回答して下さい

シドニー日本文化センター  
講演

曲がり角の日本

96年10月10日

橋爪大三郎

□1□ 95年危機——戦後50年の転回点

1) 阪神大震災

必ず訪れるはずの危機を見なかった、都市・官僚機構の脆弱な体質

2) オウム真理教事件

冷戦の図式が解体したのち、若い世代が“自由に”描いた理想世界の反社会性

3) 連合政権

五五年体制 → 細川連立政権(反自民) → 「自社さ」連立政権(反新進)  
選挙民の意思を問わないままの、政権交替・迷走劇

4) [結論] 戦後日本を安定させていた条件(国際関係、経済構造、……)が消失しつつある ⇒ 危機

□2□ 戦後日本とは何だったか

1) 連続と断絶

明治～戦前日本⇒戦後日本⇒ ? 軍部・財閥の解体/天皇・官僚の温存

2) 冷戦下日本の矛盾

冷戦＝臨戦体制 戦後日本＝戦争不可能の体制(平和憲法+日米安保)

3) 放置されたままの戦争責任問題

戦後世代の誤解: 当事者でない⇒責任がない⇒「大日本帝国」に対して責任とれず

□3□ アジア太平洋時代を迎える日本

1) 東アジア経済の台頭

改革開放以後の中国 2020年のGNP はアメリカに匹敵 世界の重心はアジアへ

2) 多様で不安定なアジア

\* 短期的な要因 不安定な政治問題(北朝鮮、台湾、中国共産党、……)  
\* 長期的な要因 この地域に、共通の文明的基盤がないこと × 儒教、× 仏教

3) アジアの時代に、日本は用意ができていない

\* 欧米的価値(民主主義)にも、アジアの伝統にもコミットしていない  
\* 大東亜共栄圏(～45)→小日本繁栄圏(～95)→全世界共存共栄戦略の構想を

# JAPAN AT THE CROSSROADS

by Professor Daisaburo Hashizume

Date: Thursday, 10 October 1996 6:30pm - 8:00pm

Venue: Japan Cultural Centre, Sydney Multipurpose Room  
Level 11, 201 Miller St, North Sydney

Bookings: Japan Cultural Centre on (02) 9954 - 0111

Noted public speaker Prof Daisaburo Hashizume, visiting Australia from the Department of Value and Decision Science, Tokyo Institute of Technology, offers his JCC audience an in depth and varied look at Japan in the 1990s - a country in a state of flux.

Prof Hashizume will examine the events and the issues which are forcing

Japan to reassess both its way of life and its relations with the outside world.

His lecture will focus on three main themes; the crisis of 1995, including the Kobe earthquake, the Aum affair, and the instability of the coalition government; the nature of post-war Japan, focusing on issues such as the imperial family, the constitution and defence, and Japanese war guilt; and finally, Japan in the Asian and Pacific age, examining the diversity and instability of the region and assessing Japan's capacity to actively engage the region.

NB: This lecture will be delivered in Japanese with English translation.

Lecture

1

2

Lecture

In this second lecture Prof Hashizume continues his exploration of the changes currently rippling through Japanese society, with emphasis on intellectual currents, ideology, social morals, and the future of "Japan Inc".

NB: This lecture will be delivered in Japanese with English translation.

Date: Friday, 11 October 1996 12:30pm - 2:00pm  
Venue: University of Technology, Sydney Room 10  
Level 15, Building 3 (Bon Marche)  
755 Harris St (near Broadway Corner)

Inquiries: (02) 9514-1564 (No bookings are necessary.)

## Japan in the 1990s : Undercurrents

by Professor Daisaburo Hashizume

Presented by the Japan Foundation and the University of Technology, Sydney



Professor Hashizume is a well-known sociologist. His activities as a social commentator cut across various forms of media and his insight on many issues, such as recent cultural phenomena and cult movements, attracts much popular and intellectual attention in the 1990s. His interests range from language, social theory, sex and power.

Selected publications  
1985 "Language Games" and Social Theory in Wittgenstein, Hart and Lehmann  
1986 The Discursive Strategy of Buddhism  
1988 Structuralism for Beginners  
1991 What Should We Think in Modern Thoughts?  
1995 On Sexual Love  
Lectures on Society

□1□ 方向を見失う思想界

1) 1970～1980：新左翼の高潮と退潮

スターリン批判→社会党・共産党と違った革命勢力（団塊の世代）→過激派三大事件（よど号ハイジャック、三菱重工爆破、連合赤軍リンチ殺人）→環境・やさしさ

2) 1980～1990：ポストモダン～ニューアカデミズム～ニューサイエンス

脱マルクス主義～フランス・ポスト構造主義→価値相対主義×スノビズム→高度消費社会（日本が一番という思い上がり）→面白ければ何でもありの相対主義全盛

3) 1990～：左翼の退潮／ニュー保守主義の台頭

湾岸戦争（ニューアカの左翼がえり）→冷戦・バブル崩壊→オウム事件（オタク世代の大あわて）

□2□ 戦後日本を構成してきたドグマの崩壊

1) 平和憲法絶対主義？

⇒憲法改正論の台頭

- ・憲法9条と日米安保条約の矛盾
- ・憲法9条と国連憲章（集団自衛権に立脚）の矛盾

2) 日本株式会社？

⇒国内投資の冷え込み

- ・年功序列・終身雇用 → 中高年リストラ・年俸制・年金破綻
- ・高度成長・安定成長 → 長期不況・低成長

3) 霞が関神話？

- ・行政指導・許認可による護送船団方式 → 規制緩和・自由競争
- ・証券不祥事、薬害エイズ → 行政不信、中央省庁の分割合理化

□3□ 古いモラルの喪失と、新しい価値観の未成立

1) ブルセラ論争

（ブルセラ＝ブルマー、セーラー服ショップ）

- ・戦後市民派：ブルセラ現象（一般女子中高生による性の商品化）は、逸脱事例
- ・ポスト戦後派（宮台真司ほか）：家庭が規範を強調するほど、ブルセラ現象は加速

2) オウム事件その後

- ・オウムを、刑事事件×マインド・コントロールに単純化 信仰の自由を認めず
- ・破防法適用が強引であることについて、論争がなかった

3) 名前のない世代

- ・紛無派→新人類→コンビニ世代？（ファミコン世代？）→ギャル → 小ギャル → 孫ギャル

日本の伝統的な「状況倫理」を抜け出した、新しい行動様式が現れるには、もう少し時間がかかる？



The Institute for International Studies

and The Japan Foundation

Present

A Public Lecture

‘Japan in the 1990s: Undercurrents’

by

Professor Daisaburo Hashizume

Tokyo Institute of Technology

Friday, 11 October 1996

12:30pm - 2:00pm

at

Room 10, Level 5, Building 3 (Bon Marche), 755 Harris St  
(near Broadway Corner)

Professor Hashizume is a well-known sociologist. His activities as a social commentator cut across various forms of media and his insight on many issues, such as recent cultural phenomena and cult movements, attracts much popular and intellectual attention in the 1990s. His interests range from language, social theory, sex and power, and his works include 'Language Games' and *Social Theory in Wittgenstein, Hart and Lehmann* (1985), *The Discursive Strategy of Buddhism* (1986), *What Should We Think in Modern Thoughts?* (1991), *Structuralism for Beginners* (1988), *On Sexual Love* (1995), *Lectures on Society* (1995).

For more information: telephone 9514 1564 fax 9514 1578

email: Tomoko.Akami@uts.edu.au

□0□ 講師紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月より大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授  
著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『わかりやすいための社会学入門』(別冊宝島)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『社会学がわかる』(共著、ABRAMACK)ほか。

□1□ インターネット登場

- 1) イッターネットは冷戦の産物だった  
・軍事通信→コンピュータを連結する必要(exミサイルの迎撃)→地球大ネットワークの形成
- 2) 冷戦の終了→インターネットの民生転用→雪ダルマ式の加入増→アメリカの世界戦略  
電話・地上波TV→独占・寡占の合理性 ⇔ 大容量光ケーブル→競争の合理性
- 3) インターネットがパソコンの普及を促進 コンピュータの保有動機を拡大  
・電子メール ・ブラウザ ・電子出版 ・データベース ・電子マネー &c
- 4) 情報スーパーハイウェイへの道  
・インターネットはまだ序の口 動画のリアルタイム処理は無理→大容量ケーブル&高速処理  
英語が標準→同時翻訳ソフトの開発で多言語化へ  
・コンピュータネットが個々人の行為をモニターしサポートする巨大システムの完成

□2□ “情報”について考える

- 1) 情報伝達の発達史  
音声言語 + 口頭伝承(形式化=韻文化と反復)  
(手紙) 文字・写本 ~古代文明・古典宗教  
(郵便) 印刷・本 ~宗教改革・近代国家  
(タイプライター) ラジオ ~ファシズム・大衆社会  
(電話) TV(地上波) ~メディアミックス・高度成長・消費社会  
(ファクス) 衛星・ケーブルTV→国境を越える情報(国が管理せず) 双方向  
+情報スーパーハイウェイ ①安価②双方向・ネットワーク
- 2) 情報 information: 言葉または記号のかたちで、この世界の事実について、人が伝える知識、または人から伝えられる知識 Cf. 木下是雄『理科系の作文技術』
- 3) インターネット以後の情報空間  
・①世界中の情報への quick access Cf. ホルヘ・ルイス・ボルヘスの世界図書館  
②発信者/受信者の構図(コミュニケーションの古典図式)の解体  
どの文書もコンピュータで作成される→情報公開により、すべての文書が接近可能に
- 4) インターネット・リテラシー: 情報空間を、自分に価値あるものに変換できる能力  
・全世界が情報空間に→検索さえすれば、発信されていなくても、情報として利用可能  
visitor → 道(ルート) → 情報  
(user) 道しるべ 情報は、user-oriented に配列し  
ガイド 直される(情報の価値への変換)  
・user-classification  
meta-information for users (editorial system) meta-information  
meta-meta-information for users : information about  
information  
……

□3□ 情報化時代の、知的サバイバル術

- 1) 『知的生産の技術』(梅棹忠夫): 知の専門家が知識を生産するための方法  
↓  
~知識・情報は貴重→手に入れたら捨てずに貯める  
『超「整理法」』(野口悠紀夫): インターネット以後の情報環境に対応した方法  
~知識・情報は豊富→手に入れても捨てる  
(すぐまた手に入る)

どの情報を捨て、またいつ捨てるかに関するメソッド

- 2) 多くの人びとが、情報の山に埋もれている→情報は一体、なんのために必要か  
・情報の機能 情報: 世界がどのようなものであるか(data=Σfact)を伝えるもの  
情報の処理にはコスト(時間と資源)がかかる



: 実現すべき事柄の優先順位(リスト)

- ・何を決定(生産)しようとするか明確でないと、何が重要で重要な情報かわからない。  
何かを決定(生産)しようとする場合も、価値前提が明確でないと、 " "。  
データベース: 共用で汎用(多目的)の情報ストック → user-oriented でない  
⇒何を何のためにやるか、はっきり自覚すべき(それがだめなら情報に手を出さない)
- 3) 情報の内部構造(Theory)に注目せよ  
・出現しそうな情報についての、確度の高い予測を与える: 理論(システム理論)  
高度なシステム理論は、大学院で学べる(効率的な情報=世界についての構造情報)  
: 情報の生成死滅についての内部的理解

□4□ ネットワークの時代の、社会運営

- 1) 近代社会→階層社会 cf 資本家(地主、経営者)/労働者(農民、商人、知識人)  
前衛党/プロレタリア(知的に自立できないとされる)  
⇒情報も知識も、一部の機関・企業・指導階級に集まる構造になっている。  
⇒情報の流れは、上から下へ、啓蒙のかたちをとる  
情報の流れは、伝言ゲーム効果やリザリティ 神話により、次第に不正確・無価値に  
・市民社会のアポリア……投票する有権者=主権者は、十分な知識と情報を持たない  
制限選挙→普通選挙+マスメディア(スキャンダル・ジャーナリズム)→?ネットワーク
- 2) ネットワーク社会→無階層社会?  
・誰がどんな情報を持っているか、という違いが限りなく意味を持たなくなる  
=リーダーが手に入れた情報と同じものを、ほかの誰もが容易に入手できる  
=リーダーや任意の誰かがどんな情報を入手したかを、ほかの誰もが確認できる  
cf グライバーの問題  
・ネットワーク: 情報活動を、人びとの共同作業で行なう Eメール、グループウェア、……  
・組織の変容 トップ～ラインの直結 ⇔ 中間管理職(対人管理10人の原則)のリスト  
情報が何段階か連結しているところでは、どこでもその直結が生じうる(情報産直)  
政府に対し、NGO、NPOの台頭 ←バーチャルで基金集めが容易に
- 3) 21世紀・ネットワーク社会をみまう革新的な変化  
・政治……選挙区グループウェア・システム 選挙区の独自性が議員を自立させる?  
・宗教……情報ハイウェイで宗教が国境を越える 非合理的組織的告発としての世界宗教  
・科学……競争システムと組織合理性がない社会は、科学を育てられない  
・経済……市場メカニズムが、政治的国家や慣習・民族の壁と衝突 貧困の拡大  
・教育……学校教育はだんだん時代遅れに 英語ブーム→一転、語学の地盤沈下  
・家族……電脳マイホームの標準化 家族類似集団も多くなる 家族倫理の再建  
・国際……情報の世界化: 先進国のことはよく分かるが貧困は改善されない→不満拡大

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。無所属を経て、社会理工学研究科価値システム専攻教授。  
著書……『言語ゲームと社会理論』『現代思想はいま何を考えればよいのか』（勁草書房）、『はじめての構造主義』（講談社）、『冒険としての社会科学』（毎日新聞社）、『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）、『橋爪大三郎の社会学講義』（夏目書房）、『知らないための社会学入門』（別冊宝島）ほか。

□1□ 大学は、小学校→中学校→高校の延長ではないのだ！

1) 大学 university ~宇宙 universe

- ・四書：論語、孟子、大学、中庸 林大学頭（儒学家元） 女大学
- ・バクダッド、カイロ大学：イスラム法学の研究 ポローニャ大学：ローマ法研究
- ・パリ大学：神学研究 ハーバード大学：牧師養成 神学部・医学部・法学部・その他

2) 日本では、文部省が大学を作った

- ・寺子屋・女紅場の切捨て 就学の強制（義務教育） 高等教育機関（帝大…の設置）
- ⇒誤解：子供を教育する権利は、国家にある 教育委員会、PTAの形骸化

3) 大学では何を学ぶか

- ・×民族教育 人類に共通する普遍的知を追究 ○科学（自然科学、社会科学）
- 哲学・歴史・文学・芸術 ○英語がベース（大学は人類社会の一部）
- ・研究（世界中で誰も考えなかったことを考える）→図書館（論文の倉庫）→講義

□2□ 大学の研究は、高校までの勉強と正反対なのだ！

1) 学校教育：①同一年齢＝同一学年、②一斉授業（教師・黒板・教室）、③画一的試験

大学教育：①社会人・留学生…… ②ゼミ（少人数の演習）中心 ③論文・レポート

2) 高校まで……答えがわかっている（のに答えを教えない） 条件反射のネズミ？

大学……答えのわからないことを研究（答えがわかっているなら、研究の必要なし）

・学説＝仮説（とりあえず真理ということにしておこう）＝疑ってもいい

3) 高校まで 教師の学力>学生の学力

大学 教授の学力<助教授の学力<助手の学力<大学院生の学力？

□3□ 21世紀は、理工系の時代なのだ！

1) 21世紀の社会は、どんな社会か

- ・人口増加（2050年に百億）×経済発展 →資源の不足・地球環境の破壊・貧困の拡大
- ・日本など先進国の役割……先端技術を開発→資源を節約→人口増と貧困の拡大にstop

2) “理工系離れ”は、そろそろ終わり ⇒21世紀は、理工系中心の時代に

- ・理工系離れの背景 ①文部省予算カット ②バブル財テクブーム ③研究室の旧体質
- ・文理統合教育が主流に 社会理工学研究科 文系社員リストラ ポスドク1万人計画
- ・アメリカ再生の原動力～理工系研究者のベンチャー企業 日本も“研究開国”を

3) 東工大はどんな学生を求めているか

- ・理科系大好き人間（かと言って、英語ができなくていいわけではない） ←→東大
- ・好奇心旺盛人間（文学や美術や哲学や……人間・社会に興味ある人間） ←→オタク
- ・超産業社会のネオ・リーダー 率直な初心を忘れず、目標の実現に向けて前進する

# キャンパス探訪

大学が「ぞうげの塔」といわれ、社会とかわりなく存在してきたのは、はるか過去の話。大学・短大への進学率が四〇%を超え、十八歳人口の減少で五〇%の割合に落ちるも時間の問題となった今、大学は激しい変革の波に洗われている。二十一世紀に向けた新しい大学とは何か、各大学の模索が始まった。

## ◆大学の顔に

「価値システム専攻」(略称バルデス・VALEDES)という聞き慣れない学科が今

## 東工大の挑戦

チューセツ工科大学と並んで世界に知られる同大の新しい顔に、と期待が集まっている。バルデスには、ユニークな音楽論で知られる細川周平氏を助教授に起用。文化人類学の上田紀行助教授を愛媛大から招くなどスタッフの充

◆追い風  
「このときは、文明科学部

## 合言葉は「21世紀の首相」 理系文系合わせた新学科

化、学際化が進む中で、より柔軟な大学教育を推し進めようという狙いで出された。具体的には一般教育と専門教育の科目区分は廃止し、各大学で自由にカリキュラムを編成できるようにした。以後、各大学は教養部の廃止ないし改組、またカリキュラムを改革するなど、大学改革が活発化。新学科設置とい

登、東工大(木村孟学長)大学院に開設された。「社会のトップに立つリーダーに必要な資質(価値システムと能力(意思決定能力)を身につけるための大学院(説明会資料)だ。同時に「人間行動システム専攻」学科も新設された。共に、理系と人文社会系の学問を融合させた。世界でも初めての領域で、理系大

「環境問題への関心が高まってきた時期で、便利さだけ

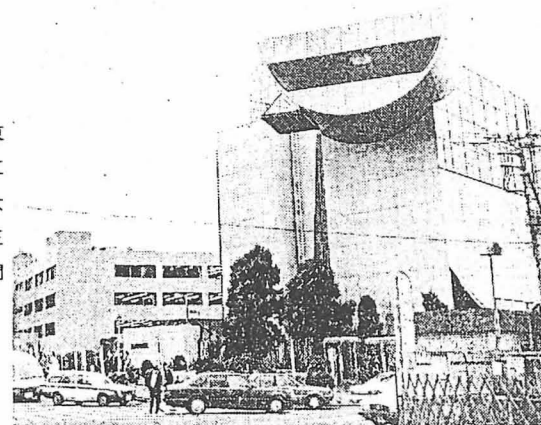
や情報学部などが提案されたが、機が熟さず、実現しなかった。外的な要因としては、行政側が新学科の必要性を感じていなかったことが挙げられる。それが、一九九一年に出された設置基準の大綱化が追い風となった。

「大綱化」とは、大学審議会の答申を指す。「大学教育の改善」(大学院の整備充実)などを柱としたもので、国際

から、従来の枠にとらわれず活躍できる人物を送り出したい」と橋爪教授。

百人を超える志願者の中、バルデスに合格したのは、修士・博士課程合わせた十八人。中には民間のシンクタンクに籍を置いている学生やマネジ

東工大正門



# □0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学工学部に勤務。1996年4月に、大学院社会理工学研究科価値システム(VALDES)専攻新設。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『知りたいのための社会学入門』(別冊宝島)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『社会学がわかる』(共著、ABRAMUK)ほか。

# □1□ ひととはなぜ、差別するのか

- 1) 分類(classification) 分類=同一性&区別
  - ・すべての言葉は、カテゴリーでできている。カテゴリー(範疇)は分類の産物である。
  - ・すべての観念は、言葉で表現される。分類は、頭の働きそのものと世界のでき方そのもの
- 2) 価値×区別(←同一性)=差別(よいもの/悪いもの)
  - ・生き物～生存～欲望 よいものを手に入れよう、悪いものから逃れよう
  - ・世界=Σよいもの+Σ悪いもの よい/悪い、の間には区別以上の価値的な違いがある
- 3) 自己同一性……自分をどう人間として分類するか
  - ・共同体:ともに生きてゆく人びとが形成した集団(☆)  $C = \{c : c \in C\}$
  - ・共同体は、対内道徳/対外道徳の二重規範をもつ 集団の内～仲間/集団の外～敵
  - ・社会=共同体+その外部 ⇒ Th. 人びとは、共同体の外の人間を差別する。

このように考えると、差別は人間社会の必然である。この限りで仕方がない。

# □2□ 差別はなぜ、ひとを苦しめるのか

- 1) 差別が苦しいのは、差別する/されることが、自分の抱く価値観と衝突するから。
    - ・ex 正義:「等しいものは等しいように、異なるものは異なるように」→折々の争い
    - ・共同体の、社会大への拡大 ⇒同じ○○人なのに…… ⇒同じ人間なのに……
  - 2) 差別される苦しみ……自分が、自分の所属すべき共同体から疎外された苦しみ
    - ・ここという共同体は、☆のレベルから拡大し、二重、多重になっている。
    - ・逆に言えば、人びとの同一性(帰属意識)は、☆のレベルから拡大し重層している。
    - ・同一性の重層(=危機)を乗り越えるために、他者を差別するというやり方が現れる。
  - 3) 二次差別(差別のための差別)……人を苦しめることを目的にする差別
    - ・二次差別の段階では、差別すること自体が目的となる。→差別は再生産される。
    - ・差別の権力工学:社会(=共同体の重層)のなかに、差別が織り込まれている
- ex 北朝鮮の「成分」 革命成分/中間成分/敵対成分 居住地区・職業・配給を決定  
ex 中国の「黒五類」(地主・富農・反革命・壞分子・右派) 档案制度  
ex 日本の「部落」 土農工商+穢多・非人 「土」支配の正統性を証明できないため?

# □3□ 差別にはなぜ、いく通りもあるのか

- 1) 差別を行なうには、手がかりとなる区別が必要 差別はカテゴリーに対するもの
  - ・差別を行なう手がかりにいろいろ種類がある →差別の種類もいろいろある
  - ・区別が、差別を行なう根拠として十分でないと思われるとき、差別が非難される
- 2) 人種差別 身体(習俗を含む)の外形的な違いを手がかりとする差別
  - ・文化レベル 異族を人間(内部のメンバー)として処遇する道がない →一次差別
  - ・文明レベル 異族と共存するのが文明のテーマ 自民族の結束⇔他民族の排斥
- 3) 宗教差別 帰属する宗教の違いを手がかりとする差別
  - ・古代宗教……共通項を設定して、新たな共同体(Σ仲間)を創造する試み
  - ⇒ 人種差別をなくすための工夫が、新たな差別をうむ 普遍宗教相互の衝突迫害
- 4) 社会的差別 2)～3)は、複雑社会のなかで再生産される →4)
  - 社会的属性……身分/職業/年齢/人種・宗教/思想/ほか
  - ・身分差別 身分が習慣として当然視されていると、差別だと自覚されない
  - ex カースト ①出生による、②人間を直和に分割、③生活を厳格に規制←→土農工商
  - ・告発相関主義……告発する主体がそれを発見した場合にだけ、区別は差別となる
- 5) 男女差別
  - ・性別は、自然カテゴリーか、社会カテゴリーか (男女は異なったものか同じものか)
  - ・性別は、相補的なものか、敵対的なものか (フェミニズム:女性=被抑圧階級→告発)

# □4□ 差別はなぜ、なかなかなくなるのか

- 1) 差別がなくなると困る人びと 何かを差別してきたこと=既得権
  - ・自己同一性に危機を感じている人びと 差別のある社会に依存している人びと
  - ・差別する心性は誰にもある →誰しもそれを隠して、社会の非難から逃れようとする
- 2) 差別は対人関係ではない 差別は構造的要因により再生産されている(=階級闘争)
  - ・自分では差別をしない(と思っている)人でも差別はする ∵差別があるという現実
  - ・反差別のための啓蒙(差別があるという知識の普及)が差別を再生産する場合もある
  - cf. 被差別者を援護するための運動が、差別を再生産する場合すらある
- 3) 差別に中立は認められるか cf. マルクス主義・階級闘争には、中立はなかった
  - ・差別について知らないことは犯罪的か 自分が差別されていないことは犯罪的か
  - ・差別を是正しないでいることは犯罪的か 糾弾集会のやり方は差別を解消できるか
- 4) 差別語(差別表現)を禁止すれば、差別がなくなるのか
  - ・「差別語」なるものが存在するか cf. どんな言葉でも差別表現に使える
  - ・差別表現にしか使えない「差別語」があるとして、それを禁止すれば、①別な差別表現をとるだけでは? ②差別があるという事実がみえにくくなるだけでは?
- 5) 日本の差別は、目に見えない差別が多い
  - ・在豪アジア系の移民 cf. 中国系に間違えられて腹を立てた駐在員の妻 →なぜ?
  - ・在日韓国朝鮮人……外見や生活実態では、区別がつかない 国籍、歴史の来歴、民族
  - ・被差別部落出身者……外見や生活実態では、区別がつかない 歴史の来歴
- 6) いじめは差別とどう違うか 似ている点:相手を苦しめることが不可欠
  - ・いじめ……相手が自分と同一であることが前提 →そこに区別を持ち込んで攻撃
  - ・差別……相手が自分と同一でないことが前提 →そこに同一性が持ち込まれたと反撥
- 7) 人びとの違いを前提にした、共同体(共同社会)をどう作るか
  - ・古典的方法→組織的な無関心 ex エルサレムのユダヤ教徒とイスラム教徒 自治
  - ・現代的方法→新たな共通項の発見 科学技術 英語 民主主義 宗教??
  - 「多様な価値観」は効率がわるい しかし自分の自由は拡大 自由のコスト

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学工学部に勤務。1996年4月に、大学院社会理工学研究科価値システム(VALDES)専攻新設。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『わかりたいのための社会学入門』(別冊宝島)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『社会学がわかる』(共著、AERAムック)ほか。

□1□ 方向を見失った思想界

1) 1960~1980: 新左翼の高潮と退潮

- ・新左翼の出発=スターリン批判 日本共産党や社会党の系譜と違う革命左翼の登場
- ・ブント(共産同=共産主義者同盟)、革共同(革命的共産主義者同盟→革マルvs中核)
- ・過激派三大事件(よど号M377、三菱重工爆破、連合赤軍あさま山荘&リンチ殺人)  
⇒ 脱マルクス主義・記号論、環境・エコロジーブーム、やさしさ・生活重視派

2) 1980~1990: ポストモダン~ニューアカデミズム~ニューサイエンス

- ・浅田彰『構造と力』(1983)~フランス・ポスト構造主義 柄谷行人、蓮實重彦、中沢新一……  
⇒ 価値相対主義×スノビズム 価値相対主義は、厳密には成り立たない立場
- ・高度消費社会 バブル経済~日本が一番という思い上がり 知が商品にすぎなくなる  
⇒ 面白ければ何でもありの相対主義全盛 TVのバラエティー化~広告代理店主導

3) 1990~ : 左翼の退潮/ニュー保守主義の台頭

- ・ベルリンの壁崩壊、ソ連解体 → 「大きな物語は終わった」言説は用済みに
- ・湾岸戦争 浅田彰の「憲法を守れ」宣言=ニューアカの先祖帰りに → まじめ復権
- ・オウム事件 オタク世代の大慌て 小状況・私的世界に閉じこもっているのか

□2□ 戦後日本を構成してきたドグマの崩壊

1) 平和憲法絶対主義?? ⇨ 憲法改正論の台頭(西部試案、読売試案)

- ・憲法9条(戦争放棄+軍隊の禁止) の矛盾 護憲派は日米安保=戦争への道と日米安保条約(軍事同盟) 反対したが、結果は平和だった
- ・憲法9条と国連憲章(集団自衛権を前提にした軍事同盟)の矛盾 ⇨ 湾岸戦争で露呈

2) 日本株式会社?? ⇨ 国内投資の冷え込み、日本の金融・株式市場の閑散

- ・年功序列・終身雇用 → 中高年リストラ・年俸制・年金破綻
- ・高度成長・安定成長 → 長期不況・低成長 財政赤字体質が慢性化
- ・貿易黒字・対外投資 → 産業空洞化・製品輸入の増大 日本の国際競争力に赤信号

3) 霞が関神話?? ⇨ 中央省庁の統廃合を含む、行政改革が政治日程に

- ・許認可・行政指導による護送船団方式 → 規制緩和・自由競争
- ・証券不祥事、薬害エイズ → 行政不信、中央省庁の分割再編
- ・官僚主導の<システム>が、既得権の整理・合理化を阻んでいる → 国会復権を

□3□ 古いモラルの喪失と、新しい価値観の未成立

1) ブルセラ論争(94~95) (ブルセラ=ブルマー、セーラー服ショップ)

- ・戦後市民派: ブルセラ現象(一般女子中高生による性の商品化)は、逸脱事例  
↳ ポスト戦後派(宮台真司ほか): 家庭が規範を強調するほど、ブルセラ現象は加速
- ・女子高生はそれほど「合理的」に行動しているのか 貨幣・感性を上回る価値なし

2) オウム事件その後 オウム=D I Yテロ

- ・オウムを、刑事事件+マインド・コントロールに単純化 信仰の自由を認めず
- ・破防法適用が強引であることについて、論争がなかった 教義論争の欠如
- ・オウムは、戦後日本の組織中心社会の戯画化 自分をなくすことが自己実現?

3) 名前のない世代

- ・紛無派→新人類(ジェネレーションX)→コンビニ世代(ファミコン世代)? → ?  
ギャル → コギャル → 孫ギャル
- ・どの世代も「新しさ」にしがみつくとすぐ陳腐化→上の世代を駆逐し下に駆逐される

4) 倫理・権威・規範の総解体

- ・遊び(祭り)としてのいじめ 戦後知識人の退場(丸山、大塚の死) 自我縮小症
- ・近代化の歪み 明治: 国家を神聖なものとした → 戦後: 企業を神聖なものとした  
現在: 企業から切り離された自我の空しさを発見 家族・地域も復権できず
- ・日本の伝統的な「状況倫理」を抜け出した、新しい行動様式が現れるには、もう少し時間がかかる?

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月より大学院社会理工学研究科価値システム専攻勤務。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『性愛論』(以上、岩波書店)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『わかりたいあなたのための社会学入門』(別冊宝島)、『科学技術は地球を救えるか』(共著、富士通ブックス)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『社会学がわかる』(AERAムック)ほか。

□1□ 政治はなぜおもしろくないか

1) 戦後の選挙は、結果がわかっていた。

- ・アメリカとの同盟を維持するために、社会党〜共産党に政権を渡すことはできない
- ・戦後民主主義を守るために、改憲勢力に国会の三分の二を与えることはできない
- ・中選挙区選挙では、マイナス・ワン(貧乏クジ)投票となる ⇒ 派閥均衡  
選挙民と関係ない、候補者(および彼らと結びついた利害関係者)の利害の争い  
⇒ 自分たちとは関係ないや、というあきらめ

2) 結果がわかっている選挙⇒儀式

- ・選択肢がない……政策は官僚が決める; 候補者は政党が決める; 政権交替はなし
- ・論争がない……イデオロギーはただの信仰表明; 論争するのは多数派でない証拠
- ・興奮しない……討論⇒説得⇒なだれ現象、が起きない; 事前運動・個別訪問禁止

□2□ 政治とはなにか

1) 政治とは……〔定義〕関係する人びとを拘束することがらを、決定すること

決定=「不確定なことを、確定したことに変換する操作」

- ・政治とは(集合的な)意思決定である。⇒選挙も(集合的な)意思決定である。  
⇒決定の前には、結果が不確定でなければならない。〜スリリング〜正統性の創造

2) 政治的決定=Σ(個人の)決断 一人ひとりの意思決定の集積が、政治的決定

(個人の)決断と、(集団の)政治的決定とは、同型である

ただし、個人の決断が合理的であったとしても、集団の政治的決定が合理的であるとは限らない(投票のパラドックス)

3) 政治的決定が、十分に機能を発揮しないとしたら

- ・個々人の意思決定が、独立でない場合(⇒決定の正統性が失われる)
- ・集計(Σ)の方法が、恣意的である場合(⇒やはり決定の正統性が疑われる)

- ・個々人がそもそも、意思決定を行わない(決定の責任を回避する)場合

4) 政治的決定をしないのが、最高の政治的決定 ……日本の伝統的な政治文化

- ・誰かが政治的決定をする⇔誰かが決定から排除される 決定の突出を嫌う
- ・誰が決定したかわからないようにする ~決定した人間の安全&従った人間の安心
- ・トップは、ある決断を下さざるをえないような状況がうまれるのを待つ  
部下は、トップの意向を忖度しつつも、決定を有利な方向に導こうとする

□3□ 民主主義は、どうすればよみがえるか

1) 民主主義とは……〔定義〕人びとを支配する法を、人びと自身が創造すること

cf. 社会一般: 社会規範(慣習、道徳など)が、社会秩序を構成  
市民社会: 法の支配 + 法の創造⇒絶対王制  
近代民主主義: 法の支配+法の創造+人民主権

2) 政治……人が人を支配すること

- 一神教: 神が人を支配する ⇒人が人を支配するのは正しくない ⇒法の支配  
儒教・法教: 人が人を支配するのは当然 ⇒天→天子→官→吏→…の階層構造  
日本教: 人が人を支配するのは避けたい ⇒同意(反対のないこと)を重視  
一神教では、神をいかに信じるか(人をいかに信じないか)がテーマ  
日本教では、人をいかに信じるか(制度や法や言論をいかに信じないか)がテーマ

3) 日本教の政治システムに、限界が見えてきた

- ・「人を信じる」関係はミクロな関係で、推移律が成り立たない ∴マクロは不適
- ・「決定をしない」政治は、不透明で、時間がかかる ∴組織の機敏な運営に不適  
日本の政治文化(日本人の行動様式)を改革する 日本人も危機感があれば変わる

4) 金の改革 政治に金がかかることを前提にする

その金をどうやって集めるかを柱に政治を設計

政党交付金は悪法⇒廃止 身銭を切る/党員チケット制/予備選挙/次点歳費制

5) 人 有能な人間をリクルートするシステム+やめた政治家の再就職

予備選を活用 下から勝ちあがり 議会の法案作成能力の強化

中央省庁の官僚は半分にする⇒国会のスタッフに再雇用

- ・政策がまずければ議員が落選して失業 ・マイナス思考からプラス思考へ

6) 情報 意思決定に必要な情報を、誰でも手に入れられるようにする

議員についての情報を、有権者は誰でも手に入れられるようにする

誰が意思決定をしたのか、その結果はどうなったか、その責任は誰にあるのか、をはっきり記録する 誤った決定を行なった政治家は、その地位を失う(信賞必罰)

7) 名誉 政治が、青年にとって魅力ある職業として、選択の対象、人生の目標となるのが大切 リスクが大きいだけに、見返りも多くあるべき